

# 研究紀要

## 第29号

- |  |  |
|--|--|
| 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚                   | 古谷 渉                                     |
| 磨製石斧の材料と加熱処理(2)                          | 大屋 道則                                    |
| 川越田遺跡の手握ね土器と祭祀(3)                        | 福田 聖<br>赤熊 浩一<br>岡本 千里<br>澤口 美穂<br>大屋 道則 |
| 埼玉県の新輪棺墓                                 | 宮村 誠二                                    |
| 埼玉県における横穴式石室の石材加工について                    | 青木 弘                                     |
| 埼玉県における古代火葬墓—武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に—         | 西田真由子                                    |
| 常陸国南部における古代寺院の展開<br>—国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方— | 梶間 孝志<br>宮原 正樹                           |
| 武蔵型板碑における種子規模の変遷について                     | 砂生 智江                                    |
| 「毛塚の石仏」と初発期陽刻図像板碑                        | 村山 卓                                     |

2015

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号住居跡貝層検出状況(南から)



5 「ヌ」グリッドコア4 45層(焼貝層)



2 「ネ」グリッドピット6検出状況(東から)



6 「ヒ」グリッドコア5 焼土・焼貝層断面



3 「ヌ」グリッドコア4 貝層、焼土・焼貝層断面



7 ピット5貝層検出状況

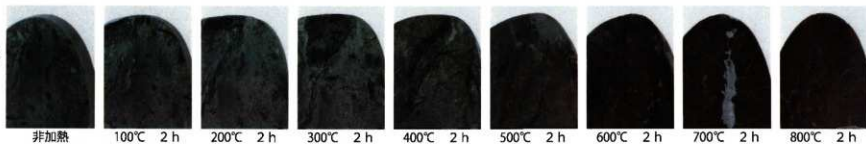


4 「ヌ」グリッドコア4 44層(焼土層)、87a層(焼土・焼貝層)

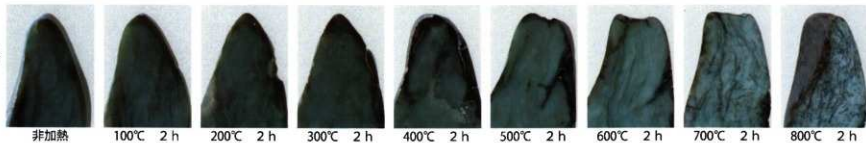


8 ピット5断面

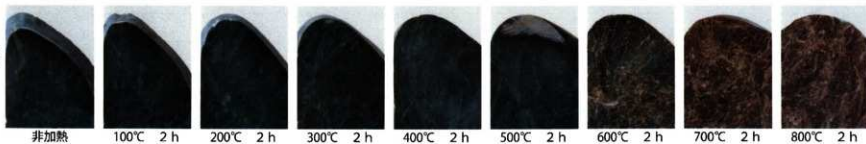
資料  
1



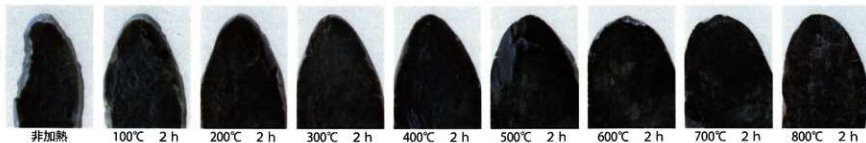
資料  
2



資料  
3

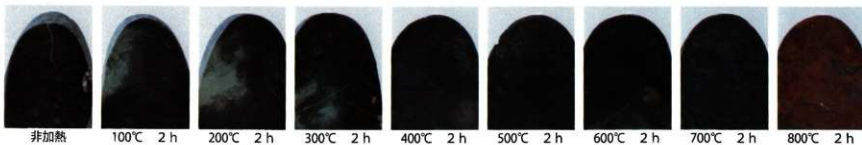


資料  
4

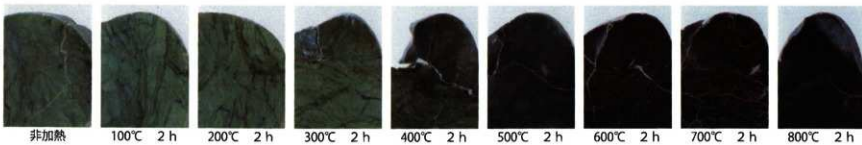


卷頭圖版 3 (大屋)

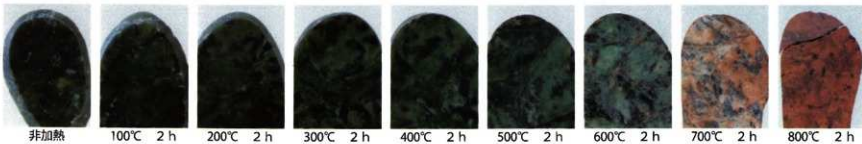
資料  
5



資料  
6



資料  
7





1 東松山市 毛塚の石仏 (全景)



2 東松山市 毛塚の石仏 (側面)



3 東松山市 毛塚の石仏 (部分)



2 川島町 長楽の石仏 (部分)

# 目次

巻頭図版

序

- 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚…………… 古谷 涉 (1)
- 磨製石斧の材料と加熱処理 (2)…………… 大屋道則 (17)
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (3)…………… 福田 聖  
赤熊浩一  
岡本千里  
澤口美穂  
大屋道則 (19)
- 埼玉県の埴輪棺墓…………… 宮村誠二 (37)
- 埼玉県における横穴式石室の石材加工について…………… 青木 弘 (51)
- 埼玉県における古代火葬墓 - 武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に -  
…………… 西田真由子 (81)
- 常陸国南部における古代寺院の展開 - 国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方 -  
…………… 昼間孝志  
宮原正樹 (91)
- 武蔵型板碑における種子規模の変遷について…………… 砂生智江 (109)
- 「毛塚の石仏」と初発期陽刻画像板碑…………… 村山 卓 (123)

## 「毛塚の石仏」と初発期陽刻図像板碑

村山 卓

**要旨** 多くの板碑が造立された13世紀の武蔵地域において、外形成形を意図しない「石仏」が僅かに存在する。本稿ではこれらの石仏に阿弥陀如来坐像が彫刻されている点を重視し、板碑・笠塔婆の事例を含めて関連資料を検討した。坐像は板碑・笠塔婆ともに当地域における最初期の資料に認められるが、武蔵型板碑では直後に立像が定着しており、立像をもって阿弥陀図像板碑の様式が確立したことが窺われる。坐像から立像への変化は仏像の変遷に影響を受けたものと考えられる。一方、坐像の石仏は、二重円光背を有す阿弥陀図像板碑の分布と相関性が認められ、図像表現や規格からも両者の工人が無関係であるとは考え難い。ただし、石仏に表現される図像は仏像そのものとして彫刻された可能性が高く、立像を尊像として確立した図像板碑の一群とは性格差が想定されよう。初発期における板碑の性格については、同時期の石造物を広く視野に入れて検討することが有効であろう。

### はじめに～「毛塚の石仏」

東松山市南西部の毛塚地区は、背後に岩殿丘陵、眼下に越辺川を望む台地上に所在し、近接する正代・高坂地区とともに古代から中世の史資料が豊富に遺存している。今回取り上げる「毛塚の石仏」(第1図1)は東松山市有形文化財に指定された際の名称であるが、その形態は一般的な石仏とはかなり異なっている。即ち像容は板石状の緑泥片岩にレリーフ(陽刻)で彫刻されており、一見して鎌倉中期における陽刻図像板碑との類似性が窺われる。ただし石材には成形を意図する加工痕が希薄で、武蔵型板碑を特徴付ける頭部山形、二条線の刻出は無い。「石仏」とされた所以である。

石仏は個人宅の裏庭に所在し、周囲は少し高まった塚状になっている。地上高84cm、下部幅59cm、最大幅66cm、厚さ約10cmの緑泥片岩に宝珠形の光背を浅く彫り窪め(以下「宝珠形光背」とする)、蓮座上に結跏趺坐する定印の阿弥陀如来坐像と七体の化仏を陽刻する。光背内の周縁部をほとんど研磨していないのが特徴的である。阿弥陀如来の像容については四方田による紹介(四

方田1993)に詳しいので、以下に引用する。

「頭部は螺髪ではなく捲き上げている。法衣は右肩をあらわす偏袒右肩で長楽路傍のものと同様であるが、こちらの方がかたい。偏袒右肩の場合右第二腕のところに法衣はかからないのが普通のようなのであるが、はっきりと刻されている。」

蓮座は半肉彫りで表現されるがやや扁平である。石材の側面にはミガキ等の調整痕跡はみられず、敲打によって部分的に整形を行うに留まる。

以上のように本資料は、鎌倉中期の板碑に認められる陽刻手法によって阿弥陀如来坐像を彫刻しながら、石材の成形を意図しない点に特異性を認める石造物である。紀年銘をはじめとする銘文は一切確認されず、遺存状態から判断して当初よりその刻出はなかったものとみられる。銘文による性格の把握が難しい以上、形態的特徴から本資料の位置付けを考察する必要がある。以下に示した若干の類例との比較から検討を始めてみたい。特に注目したいのは、本資料に表された阿弥陀如来が「坐像」であるという点である。

## 1. 類似資料との比較～阿弥陀如来坐像の資料

### ・川島町長楽の石仏（第1図2）

「毛塚の石仏」と最も類似する資料として、川島町長楽の路傍に所在する「長楽の石仏」は注目される。本資料は、『歴史考古学』第15号において坂田二三夫が紹介し、「板碑との関係から言っても、板碑以外の石仏という点でも、埼玉県下では非常に珍しい存在」と記している（坂田1985a）。『川島町の板碑』では、参考資料として拓影・巻頭カラー図版が掲載されており、調査・執筆を行った諸岡勝は、「板碑ではなく、緑泥片岩製の石仏」と、板碑とは分別する考えを示している（川島町1999、諸岡2012）。

長楽の石仏は、地上高124.3cm、最大幅56.5cm、厚さ10.6cmを測る。光背を浅く掘り窪めた宝珠形光背（深さ約1.3cm）の中に主尊の図光、体光を表した二重円相の光背（以下「二重円光背」とする）を表現するとともに、そこから弧を描くような飛天光と考えられる線を刻む。光背内の周縁部には、研磨による処理がほとんど認められない。像容は磨滅が激しいが、定印を結ぶ阿弥陀如来坐像と考えられる。顔面両側の耳の表現が丁寧で大きく表される点は、毛塚の石仏と類似している。蓮座は磨滅しているが、やや高く彫り残した部分に線刻で表現している。

阿弥陀如来坐像は毛塚の石仏より一回り大きく彫刻され、プロポーシオンにも若干の差違が認められる。しかし、光背の彫刻手法や形態には類似点が多い。両者が直線で2.5kmという近距離に所在している点も加味して、同一工人の作例と推測しておきたい。

長楽の石仏についても、紀年銘に恵まれず時期の詳細を決定することはできないが、坂田は、「蓮座の形などから見て鎌倉中期の板碑初発期頃まで遡り得る」としている。

### ・上里町帯刀菅原神社石仏（第1図3）

『上里町史』（上里町史編集専門委員会1992）にも記載があるが、拓本を掲げて詳細に取り上げたのは四方田悟である（四方田1993）。

石仏は菅原神社の社殿背後に下部を埋設して立っており、地上高112cm、下部幅67cm、厚さ13cmを測る。図像は三角形（舟形）に彫り窪められた光背内に陽刻されており、極めて遺存状態が悪い。四方田の観察によれば、主尊は頭部形態から如来と考えられ、蓮台上に結跏趺坐するものと推定している。脇侍は右側ののみ遺存しており、立像で内側を向く姿勢を採っている。両脇侍が向かい合うような構図が想定される。このような舟形光背を並列して三尊を表す板碑が嵐山町越畑、神奈川県鎌倉市等に所在し、嵐山町越畑の板碑には弘長二年（1262）の銘が認められる。本資料も1260年前後の資料であると推定したい。

### ・鴻巣市箕田龍昌寺年不詳阿弥陀一尊画像板碑（第2図4）

坂田二三夫は『歴史考古学』で長楽の石仏を紹介した際、その類例として鴻巣市龍昌寺の年不詳阿弥陀一尊画像板碑を示している（坂田1985a）。本資料は『鴻巣市史』において、「様式的に見て建長年間頃よりも古いと思われる」とされた板碑であり、古式の板碑としてその存在が注意される（鴻巣市史編纂調査会2000）。全高187cm、下部幅79cm、上部幅57cm、厚さは8cmを測る大型の板碑である。像容は磨滅が激しいが、定印を結ぶ阿弥陀如来坐像である。頭光、体光を表す二重円光背に彫り窪めている点は次の熊谷市嘉祿銘板碑に共通している。座像下には蓮座を表現するが、やや太めの線刻で表現している。なお、本資料の光背と長楽の石仏の二重円光背部は法量がほぼ一致しており、図像の各部位にも近似値を示す部分が見受けられる。





1 東松山市毛塚石仏



2 川島町長楽石仏



3 上里町帯刀菅原神社石仏

(拓本は四方田「図像彫刻三例」より転載。)



拓本は全て S = 1/15

第1図 阿彌陀如来坐像を陽刻した石仏

・熊谷市須賀広大沼公園旧在嘉祿三年銘板碑(第2図5)

武蔵型板碑最古銘を有する資料である。その発見の経緯、板碑研究史上の位置付けについては、『江南町の板碑』(江南町教委2003)に詳しいので割愛するが、同書および『埼玉県立博物館紀要』(有元・肥留間1985)では板碑の復元を試みているので、本稿ではその成果によって記述を進めたい。板碑は上部が大きく欠損しており、現状では主尊の上部は窺い知ることが困難となっているが、残された上部破片から頂部山形・二条線を有する典型的な武蔵型板碑であることが知られる。遺存部分の幅は60.5cm、厚さ5.5cmであり、『江南町の板碑』では、全長約180cmに復元する。三尊は独立した二重円光背(断面挿鉢形)に囲まれており、頭光の頂部が宝珠形に突出することが窺われる。この点は以後に続く二重円光背の資料には認められない特徴である。主尊は坐像、両脇侍は立像で表現される。蓮座は他の類別と異なって敷茄子等を表現した台座部を有している。

本資料は残念ながら主尊の上部が失われており、毛塚の石仏と細部の表現を比較することが難しい。しかし現存最古の紀年銘資料が主尊に阿弥陀如来坐像を採用する点は注目されるべきである。

管見の限り、阿弥陀如来坐像を彫刻で表す緑泥片岩製資料は上記の5例に留まる。他方、阿弥陀如来立像を彫刻で表す板碑は、初発期の武蔵型板碑にはかなりの例が知られている。なかでも熊谷市江南南小学校旧蔵、寛喜二年(1230)銘阿弥陀三尊図像板碑はその最も古い例であり、坐像の嘉祿銘板碑から三年後の紀年銘を有している。立像の主尊は二重円光背を伴って表されており、その類例は吹上・東松山地域に1240年代にかけて認められる。以後、舟形光背の資料が東松山市金谷浄光寺の建長二年(1250)銘板碑の脇侍に

採用され、1270年代にかけて少数であるが認められる(肥留間1971、1981、千々和實1972、鶴岡1973、坂田1985b、埼玉会館郷土資料室1994、新島2003)。

さらに、熊谷市旧妻沼町域を中心として善光寺式一光三尊像を刻む板碑が一時的に展開する。紀年銘資料に恵まれないが、深谷市旧在とされる建長四年(1252)銘、東京都台東区保元寺旧在康元二年(1257)銘の存在から1250年代を中心とした時期に作られたことが窺われる(石村1970、織戸1970、熊谷市史中世石造物調査班2012)。善光寺式一光三尊像板碑には化仏を表現する例が複数認められ、毛塚の石仏との関連性が問題になるが、善光寺式一光三尊像板碑に化仏が伴う例は徳島県神光寺にも見られる。これらの化仏は善光寺式一光三尊像の構成要素として表わされている側面が強いと考えるべきであろう。毛塚の石仏に表された化仏とは必ずしも結びつかないものと考えておきたい(註1)。

いずれにしても、武蔵型板碑の彫刻阿弥陀如来坐像は、熊谷市嘉祿銘板碑と古式の特徴を有する鴻巣市龍昌寺板碑にのみ認められ、以後は一貫して立像を表現している点が確認できる。武蔵型板碑の図像においては、早い段階から阿弥陀如来立像を基本とする形態が確立したと言えるだろう。では、周辺地域の同時期の石造物の場合はどうであろうか。続いて群馬県の事例を検討してみたい。

## 2. 阿弥陀如来坐像を表す笠塔婆

・群馬県前橋市小島田の石塔婆(第3図6)

仁治元年(1240)銘の多孔質安山岩製石造物であり、その特異な形態や石材から板碑の範疇に含めるか否か議論が分かれてきた。現状では地上高129cm、下部幅100cm、厚さ57cmを測る。碑面は駒形に浅く掘り窪められ、その中に阿弥陀如来坐像と脇侍のサク、サ種子を彫刻する。主尊のみが彫刻図像で表され、龕内に彫り窪められた光



4 鴻巣市箕田龍昌寺板碑

(拓本は『鴻巣市史』資料編より転載。)



5 熊谷市須賀広大沼公園板碑

(拓本、実測図は『江南町の板碑』より転載。)

拓本・実測図は全てS=1/15



第2図 阿弥陀如来坐像を隔刻した板碑

背は断面楕円形の舟形光背である。主尊は彫り残され半円形に成形された蓮座に結跏趺坐するものらしく、蓮弁は線刻で表現されている。

注目すべきは石塔の上端部に明瞭な加工痕が認められる点である(第3図写真参照)。つまり、上端面は工具によって平坦に成形されている状態であり、上部に笠を組み合わせるための加工と考えられる。本資料は、上野に多く認められる笠塔婆である蓋然性が高い。

#### ・群馬県桐生市雷電山笠塔婆(第3図7)

天神山凝灰岩製である。笠を失っているが、上部の柄の存在から笠塔婆である点は疑いない。正面にのみ阿弥陀如来を主尊とする三尊像を彫刻している。主尊の阿弥陀如来は坐像表現なのに対し、脇侍は正面向きの立像であり、近藤昭一が指摘するように武蔵型石板最古銘の嘉祿銘石板と共通する構成を採っている点は注目すべきであろう(近藤1977)。光背はいずれも二重円光背であり、しかも断面楕円形である点は埼玉県内の初発期板碑の諸例(断面楕円形)と異なっていて古風である。彫り残され半円形に成形された蓮座には立体的に四段の蓮弁を重ねており、福島県郡山市如宝寺の承元二年(1208)銘笠塔婆(第5図)との類似性が見出される。

#### ・群馬県前橋市鳥羽公民館笠塔婆(第3図8)

多孔質角閃石安山岩製の笠塔婆で塔身のみ遺存する。正面に断面楕円形の舟形光背を有する阿弥陀三尊像を別々に彫刻する。三尊とも正面向きの坐像である。主尊は定印を結ぶものであろう。彫り残され半円形に成形された蓮座にやや太い線刻で蓮弁を表現する。蓮弁にはわずかに稜線を認め、扁平ながら半肉彫りとなっている。

上野における笠塔婆で最も古い様式を備えるのは、前橋市丁見稲荷神社の資料である。本例は写

実的な笠を伴う事例で、13世紀初め頃の作例と考えられている。塔身には顕教四仏を各面に彫刻する。一方、雷電山笠塔婆をはじめ、前橋市小島田と鳥羽公民館の三例は、正面にのみ阿弥陀如来を主尊とする三尊像を彫刻している。

近藤は、雷電山笠塔婆を嘉祿以前に遡るとした上で、丁見稲荷神社笠塔婆を第一期、雷電山笠塔婆を第二期、鳥羽公民館笠塔婆を第三期と位置付けた。すなわち、四面に尊像を表し密教から浄土へ移行する過渡期の第一期から、阿弥陀如来を主尊としながらも勢至・観音菩薩の脇侍形態を採らない第二期、阿弥陀三尊形式の確立する第三期と変遷の背景を考察する(近藤1977)。

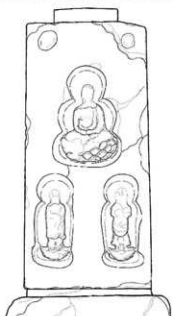
確かに福島県如宝寺の承元二年銘笠塔婆は、塔身に箱形の龕部を作り出しその中に阿弥陀一尊坐像を表しており、蓮座表現も雷電山笠塔婆より複雑である。先に笠塔婆とした前橋市小島田石塔婆は脇侍を種子とするなど、福島県如宝寺例→桐生市雷電山例→前橋市鳥羽公民館例→前橋市小島田例の変化は無理がない。

また、以後の群馬県内の笠塔婆にも種子で阿弥陀三尊を表すものや、主尊を阿弥陀如来立像とするものがある点とも矛盾しない。ただし、紀年銘資料を見る限り天神山凝灰岩製石造物の出現は連長期以降であり、雷電山笠塔婆が嘉祿以前であるならその使用が大きく遡る点を慎重に判断せねばならないだろう(群馬県史編纂委員会1998、国井1997)。

なお、近藤は雷電山笠塔婆の脇侍形態について、通常の阿弥陀三尊の脇侍では無いとし、地蔵と観音の組合せを想定している。この組合せは嘉祿銘板碑に続く円像板碑である江南南小学校寛喜銘板碑に認められる形式である(千々和實1972、江南町教委2003)。新井端は嘉祿銘板碑と寛喜銘板碑の碑面構成に類似性が高いことを指摘しており、雷電山笠塔婆の位置付けを考える上でも興味深い(新井2003)。

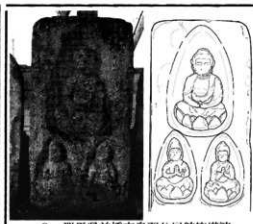


6 群馬県前橋市小島田石塔婆 (拓本は石井「数碑遺歴六十年」より転載。)



小島田石塔婆の頂部整形痕跡

7 群馬県桐生市雷電山笠塔婆



8 群馬県前橋市鳥羽公民館笠塔婆

拓本・実測図は全てS=1/15

第3図 阿弥陀如来坐像を隔刻した笠塔婆



熊谷市江南南小学校 寛喜二年(1330)

二重円光背を伴う阿弥陀立像圖像板碑



熊谷市久保寺

嵐山(山)市香林寺  
仁治二年(1241)



吹上町金堂寺  
仁治三年(1242)

関連資料分布図の凡例

- ★ 阿弥陀坐像圖像石仏・板碑(緑泥石岩)
- ☆ 阿弥陀坐像笠塔婆(安山岩・凝灰岩)
- 阿弥陀立像板碑(二重円光背)
- 阿弥陀立像板碑(善光寺式一光三尊像)

(拓本、実測図は『江南町の板碑』・石井『板碑通覧六十年』より転載。)



関連資料分布図



熊谷市 聖法殿南天

善光寺式一光三尊圖像板碑



熊谷市 福寿院



熊谷市 龍満寺



嵐山(山)市 淨光寺

拓本・実測図は全てS=1/20・ただし写真は縮尺不同

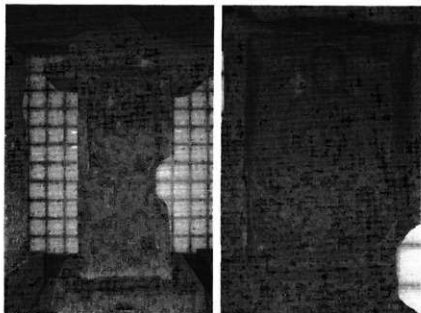
舟形光背を伴う  
阿弥陀立像板碑



神奈川(川)県鎌倉市 有田塚日在

第4図 阿弥陀如来立像を隔刻する板碑と関連資料分布図

いずれにしても、群馬県内の笠塔婆には13世紀第二四半期頃の阿弥陀如来坐像を表す資料が少数認められる。福島県如宝寺の承元二年銘笠塔婆に続き13世紀前半以降、坐像を表す笠塔婆の制作が続いていたことを確認しておきたい。



第5図 福島県郡山市如宝寺の笠塔婆

### 3. 光背の表現方法について

板碑にみられる光背の表現方法については、概ね二重円光背から舟形光背への変遷が知られており(坂田1985bほか)、近藤昭一は笠塔婆の観察から断面箱彫りから断面葉研彫り(掃鉢形)への変遷を示唆している(近藤1977)。

本稿では、毛塚と長楽の石仏にみられる浅く広い光背を「宝珠形光背」とし、舟形光背と区別してきた。ここでは、あらためて長楽の石仏の光背表現が宝珠形光背と二重円光背を組み合わせている点に着目したい。このような表現は仏像の光背にしばしば観察され、長楽の石仏はこれを忠実に模していると考えべきである。また、毛塚の石仏も化仏を配置する光背を表現したものであるが、これが善光寺式一光三尊像に顕著に認められる点は前述したとおりである。両者が直接結びつくか否かは別として、いずれも仏像を模す意識が強いことが窺われよう。(註2)

1250年代以降に普及する舟形光背も仏像の光背を意識したものであろうが、毛塚・長楽の石仏や善光寺一光三尊像の例と異なり光背内の化仏や装飾はまったく意識されていない。この点において毛塚・長楽の石仏は仏像そのものとして造立

された蓋然性があり、「石仏」という呼称にも合理性がある。他方、出現期の板碑や笠塔婆が二重円光背を採用する点は問題としなければならないだろう。今後の検討課題としたいが、絵画資料の阿弥陀如来像に二重円光や頭光のみを表現するものが多いことは留意されるべきではなかろうか。

### 4. 初発期板碑と阿弥陀如来坐像の石造物

以上のように、阿弥陀如来坐像を表す石造物は、13世紀前半の笠塔婆に少数ながら確認され、武蔵型板碑も最古銘を刻む嘉禄銘板碑では主尊が坐像である点が留意されよう。ここに紹介してきた諸資料は13世紀前半に主流をなす阿弥陀如来坐像の流れの中に位置付けられものと考えられる。

個々の資料に具体的な時期を与えることは難しいが、概ね第6図のような変遷を仮定した。長楽の石仏は全体の図像が大きく、仏像光背を模した宝珠形光背を有することから古い段階に、より表現が硬い毛塚の石仏はこれよりやや降る時期を想定した。板碑では、龍昌寺板碑の蓮座が線刻である点から嘉禄銘板碑より後出としたが、両者の前後関係を断定するのは困難である。笠塔婆は光背の彫刻方法、蓮座の表現等から雷電山例→烏羽公

石仏

(外形非盤形資料)



埼玉県川島町長染石仏 (緑泥片岩)

- ・一尊坐像
- ・宝珠形光背 + 二重円光背
- ・線刻蓮座



埼玉県東松山市毛塚石仏 (緑泥片岩)

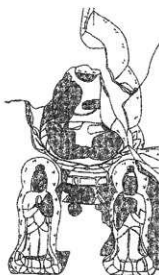
- ・一尊坐像
- ・宝珠形光背 (七仏)
- ・線刻蓮座



埼玉県上里町帯刀菅原神社石仏 (緑泥片岩)

- ・三尊坐像 (三尊並列)
- ・舟形光背

板碑



埼玉県熊谷市須賀広大沼公園板碑 (緑泥片岩)

嘉禄三年 (1227) 銘

- ・主尊坐像、脇侍立像 + 二重円光背
- ・線刻蓮座



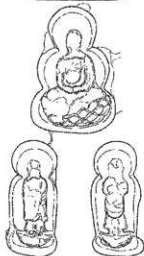
埼玉県鴻巣市箕田龍昌寺板碑 (緑泥片岩)

- ・一尊坐像
- ・二重円光背
- ・線刻蓮座

※種別毎に定座順序を示したもので、下方ほど新しい時期が想定される。ただし、種別毎の併行設置には十分な根拠が無く、あくまで仮定である。

0 50 cm

笠塔婆



群馬県桐生市青龍山笠塔婆 (凝灰岩)

- ・主尊坐像、脇侍立像 + 二重円光背
- ・線刻蓮座



群馬県前橋市島羽笠塔婆 (安山岩)

- ・三尊坐像 + 舟形光背 + 線刻蓮座



群馬県前橋市小島田石塔婆 (安山岩)

- ・仁治元年 (1240) 銘
- ・主尊坐像、脇侍童子
- ・舟形光背 + 線刻蓮座

第6図 阿弥陀如来坐像隔刻資料の集成



民館例→小島田例の順に時期が降るものと考えて良いだろう。小島田石塔婆が仁治元年銘であるので、1240年頃までの変遷である。

このうち、毛塚の石仏、長楽の石仏は光背の彫刻手法と形態に共通性があり、また、長楽の石仏と計測値が近似値を示す龍昌寺板碑の資料は同一工人の作例である可能性が考慮される。嘉禄銘板碑の二重円光背も両者に法量が近い。これらの資料が分布する東松山・吹上・熊谷地域は、1230年～40年代に二重円光背を伴う阿弥陀圖像板碑が集中して分布する地域であり(千々和實1972、千々和到1973、肥留間1981)、毛塚と長楽の石仏資料も初発期板碑の制作者と無関係とは考え難い。この時期に緑泥片岩に陽刻圖像を彫刻できる工人は限られていたはずである。

他方、群馬県下に分布する笠塔婆は、坐像の光背・蓮座に一定の変遷傾向が窺われるが、各資料の石材も異なり、一連の系譜が辿れるか否かは判断し難い。少なくとも武蔵の緑泥片岩の資料とは法量や蓮座の表現が大きく異なっており、上野と武蔵の工人の接点は見出せない。両地域で坐像が立像に先行して出現する背景については、当該期における仏像表現の変遷を反映した結果と理解するべきである。重源の三尺阿弥陀や快慶の安阿弥様に象徴されるように、平安末期から鎌倉初期に阿弥陀如来立像の彫刻が普及する現象と関連するものであろう。仏像彫刻の様式変遷は武蔵・上野の石造物にも大きく影響を与えたのである。

武蔵型板碑においては江西南小学校寛喜銘板碑以降、阿弥陀如来立像が主体化しており、立像をもって阿弥陀圖像板碑の様式が確立したものとみることが出来る。このような中において、緑泥片岩製の石仏3例がいずれも坐像を採用する点は偶然ではなからう。毛塚・長楽の石仏は時期的な問題から坐像となった可能性もあるが、光背表現からみれば両者とも仏像を模す意識が強いことが窺われる。また、菅原神社の資料は1260年前後に

あって坐像表現である。これらの資料はそもそも板碑とは本質的に異なる役割を有していたと考えられ、そのような資料がこの時期に限って出現することは留意されるべきであろう。

おわりに

本稿では東松山市毛塚の阿弥陀如来坐像石仏を基点とし、武蔵型板碑出現期前後における石造物の問題を考えてみた。坐像陽刻の石造物は板碑・笠塔婆・石仏に認められ、数は少ないながら武蔵型板碑出現期前後に類別が認められる。特に、13世紀前半から半ばの笠塔婆に阿弥陀如来坐像を採用する例があることや、「嘉禄の板碑」が主尊を阿弥陀如来坐像とする点は注目に値する。大きくは同時期の木製、金属製の阿弥陀如来像に認められる坐像から立像への変遷と対応するものと捉えられるが、武蔵型板碑の阿弥陀如来圖像板碑が早くから立像に主体を移す背景には注意すべきであろう。同時に、初発期板碑の出現、展開と併行して阿弥陀如来坐像の石仏が造立された点は、当該期における信仰対象の多様性を考える上で留意すべき問題と言える。

長楽の石仏を紹介した坂田は、「板碑初発期の頃は頭部山形、二段の切込みという形にこだわらず、このような石塔婆が色々な形で製作され、それが次第に定型的な板碑の型の中に統一されていったのであろう」と記し(坂田1985a)、同じく四方田は「板碑の形式が確立する以前には、この様な石仏であったかも知れず、また板碑の形式を受け入れない系統の人々もいたかも知れない。あるいは、この様な石仏は御堂などの本尊として安置されていた可能性もあろう。」と指摘している(四方田1993)。先行研究の成果を鑑みながら関連石造物との比較研究を行うことも、初発期板碑の性格を考える上で重要な視点となり得るであろう。

## 謝辞

毛塚の石仏の調査については、管理者新井氏のお世話になり、現地では矢口翔馬氏、砂生智江氏の協力を受けました。

また、野口達郎氏・伊藤宏之氏には貴重なご意見を頂き、文献の入手についても協力して頂きました。末筆ながら記して感謝致します。

註1 毛塚の石仏を最も早く紹介したのは『武蔵国板碑集録』であろう。千々和實は板碑に表された陽刻像とは別系統としつつ、善光寺式一光三尊像板碑の系統をひく可能性も指摘する（千々和實編 1973）。

註2 善光寺式一光三尊像板碑の場合は仏像を描いた図像を模した可能性も指摘されている（織戸 1970）。いずれにしても善光寺の本尊を忠実に模す必要があったことに変わりはない。

## 引用参考文献

- 新井 端 2003「江南町の板碑復元と製作」『江南町の板碑』江南町教育委員会  
有元修一・肥留間博 1984「陽刻像板碑の類例と嘉祿銘板碑の復元」『埼玉県立博物館紀要』11  
石村喜英 1970「関東における善光寺式弥陀三尊信仰の背景」『東京史談』菊池山哉先生追悼号 東京史談会  
織戸市朗 1970「善光寺如来像考」『東京史談』菊池山哉先生追悼号 東京史談会  
上里町史編集専門委員会 1992『上里町史』資料編  
川島町 1999『川島町の板碑』  
國井洋子 1997「中世東国における造塔・造仏用石材の産地とその供給圏」『歴史学研究』702 歴史学研究会  
熊谷市史中世石造物調査班（伊藤宏之） 2012「建長四年銘阿彌陀三尊像板碑」『熊谷市史研究』第4号 熊谷市教育委員会  
群馬県史編纂委員会 1988『群馬県史』資料編8  
江南町教育委員会 2003『江南町の板碑』  
鴻巣市史編纂調査会 2000『鴻巣市史』通史編上巻  
鴻巣市史編纂調査会 1991『鴻巣市史』資料編2  
近藤昭一 1977「笠塔婆考」『信濃』第29巻5号 信濃史学会（『中世日本人の信仰』2007に再録）  
埼玉会館郷土資料室 1994『石のみほとけ』（埼玉会館郷土資料室第153回展示図録）  
坂田二三夫 1985a「埼玉県の板碑拾遺雜記」『歴史考古学』第15号 歴史考古学研究会  
坂田二三夫 1985b「埼玉県下の図像板碑」『歴史考古学』第16号 歴史考古学研究会  
千々和到 1973「東国における仏教の中世的展開」『史学雑誌』82-2・3（『板碑とその時代』1988に再録）  
千々和實 1972「板碑にみる中世仏像表現」『仏教芸術』十二月号（『板碑源流考』1987に再録）  
千々和實編 1973『武蔵国板碑集録』3 雄山閣  
新島喜久雄 2003「埼玉の画像板碑」『江南町の板碑』江南町教育委員会  
鶴岡静夫 1973「初発期板碑の検討」『日本歴史』303号 日本歴史学会  
肥留間博 1971「初発期陽刻像板碑の紹介と検討」『史迹と美術』416号 史迹美術同研究会  
肥留間博 1981「陽刻像板碑巡礼」『武蔵野』300号 武蔵野文化協会  
諸岡 勝 2012「長楽阿彌陀図像石仏」『日本石造物辞典』吉川弘文館  
四方田裕 1993「図像板碑三例」『埼玉史談』第39巻4号 埼玉県郷土文化会

## 図版文献

第3図6と第4図の拓本は、石井真之助 1974『板碑遍歴六十年』木耳社からの転載であるが、菅原神社石仏拓本は四方田 1993、龍昌寺板碑拓本は鴻巣市史編纂委員会 1991、大沼公園嘉祿銘板碑の拓本、実測図は江南町 2003によった。

**研究紀要** 第 29 号

2 0 1 5

平成 27 年 3 月 25 日 印刷

平成 27 年 3 月 31 日 発行

発 行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒 369 - 0108 熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電 話 0493 - 39 - 3955

印 刷 巧和工芸印刷株式会社